第１３３回北信越地区高等学校野球大会指導者研修報告

長野県軽井沢高等学校　　遠山　竜太

１、はじめに

今回、昨年度より始まった北信越地区高等学校野球大会の研修の機会をいただき、１０月１６日～１８日の三日間、富山県で行われた大会を視察させていただきました。近年の北信越の高校野球は、昨夏は４校がベスト１６・今春は福井県の敦賀気比が全国優勝と躍進を続けています。その中で、今回は北信越大会の準決勝・決勝ということで、甲子園をかけた緊張感のある一戦を間近に観ることができ、貴重な経験となりました。今回の研修を通して学んだこと、感じたことを報告させていただきます。

２，試合観戦

10月１７日

《準決勝》　富山市民球場

① 長野商業高校（長野１位）-　福井工大福井高校（福井２位）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
長野商業	０	０	０	０	６	０	０	０	０	**６**
工大福井	０	１	５	０	０	０	４	１	×	**11**

甲子園がかかる大事な一戦であり、そのせいもあってか序盤にダブルプレーを狙ってのエラーやバント処理でのミスでの失点と継投後の四球での失点が目立ちました。４回より投手のテンポも良くなり、いいプレーも出ていたのでもったいなく感じました。８回の継投も同様だが、回の途中での継投は強い精神力がないと難しいとのことでした。大舞台でも勝負にこだわりすぎず、どんな状況でも目の前の打者にいつも通り徹底して投げられる精神力はこのような場を経験しながら身についていく部分でもあると感じました。しかし攻撃面では序盤遅い球を引っかけるバッティングが目立つ中、中盤チャンスでのセンターから逆方向への集中打はすばらしいものでした。また積極的な走塁もレベルの高さを感じることができました。ランナー２塁でキャッチャーが若干３塁ベースから遠ざかる方向へはじいたときの瞬時のスタートの良さは日頃の練習から意識的に取り組んでいるプレーであると思います。継投やミスでの大量失点が勝負を分ける厳しさを痛感した試合ではありましたが、要所でみせる隙を突く細かいプレーや終盤にかけての勝負強さはとても鍛えられていると感じることができました。

② 敦賀気比高校（福井１位）-　佐久長聖高校（長野２位）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
敦賀気比	０	０	０	０	０	０	２	５	０	**７**
佐久長聖	０	０	０	２	１	０	０	０	０	**３**

敦賀気比のシートノックでは選手の足の動きがとても良く、こういった緊張感あるゲーム前でも淡々といつも通りのプレーをしているようでした。それが初回のファインプレーを生み、勝つチームのレベルの高さを感じました。この試合両投手序盤は非常にテンポが良く、それに打者が打席で立ち遅れているように感じました。そんな中、両チーム２巡目は立ち遅れないように修正をかけてきました。そこで佐久長聖のバッテリーは中盤以降、テンポに変化をつけてきました。ロージンを使用したりセットの秒数の変化をつけ、バッターのタイミングで打席に立たせない工夫もあり、中盤まで上記のようなゲームになったのだと思います。そのような相手チームの変化に気付き、試合内で修正をかける力を自分自身つけていき、選手にも伝えていきたいと思いました。終盤は佐久長聖の守りのミスがあり、敦賀気比の中軸が逆方向へのヒットで繋ぎ、このようなゲームとなったが、気付くことが多い充実した試合でした。

10月18日

《決勝》　富山市民球場

③ 敦賀気比高校（福井１位）- 福井工大福井高校（福井２位）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
工大福井	0	1	0	0	0	0	0	0	0	**1**
敦賀気比	2	4	0	0	0	0	0	0	x	**6**

決勝戦は福井県勢の対決となりました。秋の県大会、今夏の県大会と同じ組み合わせであり、お互い知り渡っている同士どのような試合になるか楽しみでした。試合開始前の応援歌合戦は独特のものがあり、福井県特有のスタイルなのかとも感じました。

敦賀気比の先発は前試合と同様、甲子園でも投げた山﨑投手でした。明治神宮大会や春の選抜を見据えての連投なのか、立ち上がりが気になりました。試合が始まると序盤、やはりゲッツーのミス、バッテリーミスが絡み失点となりました。敦賀気比はランナー２塁のケースのワイルドピッチで一気にホームインしたシーンがありました。緩い変化球ではギャロップを大きく踏みショート裏までリードをとるなど隙を見せない走塁でした。

工大福井も好投手である山﨑投手をなかなか打つ崩せない中、球場が人工芝であることや投手を揺さぶるため、投前３つのバントでチャンスを作るなど工夫がありました。いかに好投手を崩すかという点で、投手に際どいバントを仕掛け揺さぶり、ミスを誘っていたようにも見えました。しかし、そこでバントを３塁封殺に決める攻めの守備や、ピンチで難なくゲッツーを成立させる敦賀気比の守備・精神力はいかに鍛えられているか思い知らされました。

９回の守備では内野安打２本でピンチを迎えましたが、6-4-5のプレーでピンチを防ぎゲームセットとなりました。遊撃手は２塁転送後、二塁手は瞬時に１塁転送を無理と判断し、３塁へ送球を行い、３塁回ってオーバーランをした走者をタッチアウトとなりました。普段練習ではよく行うプレーではありますが、野手の視野の広さや瞬時の判断は素晴らしいものでした。このように多くのチームはミスで失点を重ねる中、最後までミスなく攻めの守備で勝負ができる敦賀気比はやはり全国で勝つチームであり、勝つために徹底されており、個の能力も含め、違いを感じさせられました。

３、終わりに（まとめ）

今回の３試合を通して勝敗を分けたのはやはりミスからの失点でした。これはもちろん日頃の練習で鍛えていかなければならない部分でもあります。また試合の流れの中で様々なものを感じ、修正をしていくことも重要です。しかし、今回の研修で試合開始前から勝負は始まっているという点で、指導者としての甘さを感じ思い知らされました。

大会観戦に先立って小林善一先生のご厚意で新潟医療福祉大学硬式野球部の佐藤和也監督（元新潟明訓高校監督）にリーグ戦のお忙しい中お越しいただき、様々なお話をもらう機会をいただきました。試合に臨む上で佐藤先生がどのようなことを感じているかを中心に聞く事ができました。その中で強く訴えていたことは「ニオイを感じる、慣性を磨く」ことが指導者として勝つために大事であるということでした。

ゲームが進む中で流れや相手の様子などを感じ、手段を選ぶことはもちろん大事ですが、試合前にいかに勝負に繋がるものを感じられるかも重要になってきます。公式戦であれば、背番号もあり相手選手のデータもあるケースが多い中で、相手のムードメーカー（のらしてはいけない選手）、試合前にどういった練習をしているか（ゲーム内で相手が意識的に取り組んでくるであろう点）、監督の様子などから、いかに勝ちに繋がるものを感じることができるかが試合に臨む上で必要になってくるとのことでした。それを身につけるためには日々の練習試合の中でチームの中心選手やエースピッチャーを見抜く、相手選手の言動を感じるなど日々の訓練や何気ない生活の中でも意識していくことが必要だと感じました。練習試合や公式戦を観戦する際、自分なりのオーダーを組んで（ベースコーチも含む）実際のものと見比べてみることで訓練にもなるとのことでした。

今まで試合前のシートノックでは、相手の様子やグラウンドコンディションは心がけて注意していたが、相手が球場入りしたときから相手をよく観察して勝負に繋がることを感じることができれば、勝負により一層活きてくるのかなと感じました。

例をあげると今大会でも試合前にシャトル打ちをしていたチームがあり（変化を崩されても打つためと捉え）ストライクからボールになる変化球勝負かな。相手のバッテリーは足が長いから、バント処理などフィールディングに難があるのでは。佐藤監督が何気なくおっしゃった一言が実際の試合で勝負を分けたケースも見られました。そういった部分を試合前に見抜く、感じることが指導者として重要だと感じました。簡単に身につくものではないが、日々心がけて鍛錬していきたいと思います。

今回の研修では小林先生、佐藤監督と一緒に試合観戦させていただいたことで、試合前や試合中の勝負観を聞く事ができました。当たり前ではありますが自分自身が気付かない部分の気付きも多くあり、凄みを感じるとともに自ら身につけなければいけない部分に気付くことができました。大会に臨むまでの勝つためのチームづくりの過程ももちろん大事ですが、試合を勝ち抜くためにニオイを感じられる力を身につける必要性を実感しました。そのようなものを感じる指導者としての慣性を磨けるように今後のゲームに臨み、鍛錬していきたいです。

今回の研修で一緒に参加した松本先生、望月先生と多くの情報交換を行ったり、小林先生や佐藤先生と試合を観戦させていただいて、多くのことを学び得ることができました。その多くのものを今後の指導・活動に活かしていこうと思います。今回このように貴重で有意義な研修となったのは、世話人として同行してくださった小林先生、計画いただいた山岡先生はじめ諸先生方のご協力があってのものと思います。このような貴重な研修機会をくださった長野県高校野球連盟に心から感謝申し上げます。

第１３３回北信越地区高等学校野球大会指導者研修レポート

長野県野沢南高等学校
責任教師：松本 豊明

１．はじめに

今回、第 133 回北信越地区高等学校野球大会の指導者研修に参加する機会をいただき、10 月 16 日(金)～10 月 18 日(日)の３日間の日程で富山県に行かせていただきました。昨年度からはじまったこの研修ですが、「若手指導者の育成を目指す」という本来の目的からは少しはずれた年齢の私にも今回のチャンスをいただけたことを、大変光栄に思うとともに、長野県高校野球連盟のご配慮に感謝申し上げます。ありがとうございました。

現在の北信越地区は、選抜優勝校の敦賀気比を筆頭に甲子園でも上位進出が可能なレベルの高い地区となっております。今回の研修を通じて、長野県がここに食らいつくためのヒントは何かを知るための貴重な経験となりました。

２．第１日目

１日目は、長野から富山への移動が主でした。移動の車中では、世話人の小林善一先生の監督時代のお話や、今の長野県の高校野球を取りまく環境・現状について教えていただきました。やはり、指導者のレベルや意識の高さ、野球への情熱が選手やチームの育成には不可欠であり、我々指導者はそれを外に発信、出力することが大切であると感じました。

また、小林先生の計らいで、新潟医療福祉大学硬式野球部監督の佐藤和也監督（前新潟明訓高校野球部監督）にいろいろなお話をしていただき、大学野球界の現状や、高校野球の指導者として大切なことなどを知ることができました。どんな話をしていても、野球に賭ける思いや情熱が伝わってきて、私自身のやっていることが「まだまだ浅い」「考え、悩みきれていない」ことに気づかされました。

３．第２日目

２日目は、準決勝の２試合を観戦しました。

富山市民球場（富山アルペンスタジアム）は北信越でも一番最初に人口芝を導入した球場であると言うことを知らずに行った私はとても恥ずかしい思いでした。ただ、他県の球場事情や建設の経緯など、自チームが強い弱いというプレーのことだけでなく、こういったことも知っておくことは大切だと感じました。（開放感はあるが日陰が無いのが残念でした）

準決勝　第一試合

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
長野商業（長野1位）	0	0	0	0	6	0	0	0	0	6
工大福井（福井2位）	0	1	5	0	0	0	4	1	×	11

（長）冨岡、中野、チョー徳光
（工）田中、石黒、氏家、巽、福田－島谷

３時間を超える熱戦でした。改めて「投手交代」の難しさを感じた試合でした。３人合わせて１２安打８四死球で 11 失点。リリーフ投手の試合への順応の難しさや、監督という役職の難しさを痛感しました。四回裏、福井工大のエースが自打球のため途中交代後の０―６で迎えた五回に打線が４長短打を集めて６―６の同点に追い付いた場面は「さすが長野商業」とも思わされた瞬間でした。七、八回の再び失点した場面も、野球が「リズム」「間」のスポーツであることを痛感させていただきました。

また、守備の「ちょっとしたミス」による差が試合の流れを大きく左右し、「秋のチームだから」ということももちろんあるのでしょうが、どういう守備練習をしたら良いのか、ボールを捕るとは・投げるとはどういうことなのかという基本を考え直す良い機会になりました。

準決勝　第二試合

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
敦賀気比（福井1位）	0	0	0	0	0	0	2	5	0	7
佐久長聖（長野2位）	0	0	0	2	1	0	0	0	0	3

（敦）山崎－井戸川
（佐）森本、安藤－宮石　　本塁打：（敦）植村

佐久長聖の相手投手の 140ｋｍを超えるストレートに負けないスイングに驚きました。やはり「キャッチャーがボールを捕球する瞬間にボールが消えた」と思うようなスイングスピードを養うことが大切だなと思いました。また、敦賀気比の打線からは、３番、４番バッターが反対方向へきっちり強い打球を打つ姿勢が打線の厚み、凄みを増す否決なのかと思いました。

８回の攻防では、１out１・３塁、２―１のカウントから長聖の森本投手が投じた１球が、非常にきわどい判定であり、その後佐久長聖から流れが逃げていったことからも、「あの１球が…」と悔やまれるし、甲子園に行くことの難しさを感じた瞬間でもありました。ただ、森本投手の「投球術」には目を見張るものがあり、大変勉強になりました。

また、バントについては改めて考えさせられました。実施のタイミングや、作戦、戦術などにおいて本当に奥深いプレーであると感じました。是非とも今後の参考にしていきたいです。

４．第３日目

３日目は、決勝の１試合を観戦しました。

試合開始前、ウォーミングアップから見ようということで、チケット売り場に並びました。福井県勢同士の試合であるにも関わらず、両校の保護者だけではなく、一般のお客さんの数も多く、富山での高校野球の人気・注目度の高さを感じました。また、敦賀気比高校の野球部のベンチ外の選手の練習風景や行動を見る機会がありましたが、抜いている選手は一人もおらず、練習の質や選手一人一人の意識の高さを感じました。

決勝戦

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
工大福井（福井2位）	０	１	０	０	０	０	０	０	０	１
敦賀気比（福井1位）	２	４	０	０	０	０	０	０	x	６

（工）巽、石黒、福田－島谷

（敦）山崎－井戸川

前日の佐久長聖との試合で完投している敦賀気比のエース山崎投手がどういうピッチングをするのかに注目をして見ていました。前日の疲れもあったのか、球威はそれほど感じなかったものの、敦賀気比を上回る８安打を放った福井工大福井から３併殺を奪うなど、丁寧に低めにコントロールしながら、無失策の守備でリードを守りきっていきました。

前日の試合もこの日の試合も、チャンスをモノにできるかできないか、「ここ一番」で力を発揮できるかできないかが勝負の分かれ目であり、指導者の腕の見せ所でもあるのかと思いました。

５．まとめ

今回の視察を通じて、一番感じたことは、小さい子どもや女性のファンが多いことに驚きました。単にチームの保護者であるだけでなく、乳飲み子を連れたお母さんや、高校生に混じって選手以上のキレを出してダンスをしている幼稚園児など、高校野球愛する全ての人に支えられていることを感じました。今回のような大きな大会を見て・聴いて・感じることで「憧れ」が生まれ、次の世代の選手達が育っていくのかと思うと、私たちが背負う責任とはどれほどのものかと思いました。もっと魅力ある野球をして、次世代に野球のすばらしさを伝えていかなくてはならないと実感しました。

また、野球というスポーツにおいて「勝利のために」はどのようなことを行えば良いのかについては、「明確な何か」があるわけではないが、それぞれの学校や環境、事情などを充分に考慮しつつ、目の前にいる選手達と共に模索していくことに我々指導者は付加価値や喜び、楽しみを見いだしていくことが大切であると学びました。

最後に、この貴重な研修機会を与えてくださった長野県高校野球連盟に心から感謝申し上げます。また、研修期間中、世話人として同行してくださった小林善一先生には、大変お世話になりました。重ねて御礼申し上げます。

北信越地区高等学校野球大会研修レポート

茅野高等学校　望月 千弘

1. はじめに

今回、10 月 16 日 ~ 18 日の 3 日間、北信越地区高等学校野球大会の指導者研修に参加する機会をいただき、準決勝、決勝の 3 試合を観戦させて頂いた。それらの試合を観戦し、感じたことをレポートする。

2. 試合観戦

① ストレートに関しては、どのチームもきちんと打ち返す力がある。

準決勝からの観戦で 4 チームの共通項としてストレートをミートする能力の高さを感じた。そのため打者は、基本的にストレートに合わせている印象を受けた。その理由として投手のストレート以外の持ち球のコントロールが、あまり良くないことがあげられる。投球の割合もストレートが基本的に半分以上を占め、投手にとってカウントが悪くなるとストレートでカウントをとる場面が多く見られた。また高校生の投手は、さまざまな理由が混在し、状況によってストレートしか投げることができない状態になることもしばしばある。それらを踏まえて、ストレートを打ち返せるということが勝ち上がるために必要な条件であると思われる。

得点力の高いチームは、ストレート、変化球問わず狙った球種をきちんと打ち返すだけではなく、狙った球種以外に対してカットが出来る、軽打が打てるといったレベルの高いプレーも目の当たりにした。それぞれの打者が球種を把握し、投球とのタイミングの中で間がとれたスイングが出来ていることが非常に重要であると感じた。

攻撃としては、基本的な“ストレートに的を絞り、打ち返す”ということを前提の目標として、試合全体を通してやり続けられる状態にしたい。

投手としては、ストレート＋αの球種をストレート並みにコントロール出来る力が勝ち上がるためには必要である。ただし、ストレートがある程度コントロールできることが不可欠な要素である。おおまかなコントロールをどの球種でも投球出来ること、ストレートに限って高いコントロールがあることのどちらかが秋の大会を勝ち上がるためには最低条件として投手に求められることだと思う。

② 投内連携について

投手の絡んだ連携は、北信越大会の準決勝以降であっても不十分な点が多く見られた。内野ゴロに対するバックアップは、無意識下の中で反応しているので徹底して出来ているようだった。しかし、バントに処理に対しては、そのときの状況などを踏まえてのプレーであったり、フットワークが不十分であったりとこれからの課題としてあげられる部分が多かった。バント処理のミスからの失点は非常に多く、大量点につながることも多々ある。その状況において原因はさまざまだが、チームとしての事前の確認の有無は、ミスへの影響力は大きいと思われる。後回しになりがちな練習であるからこそ、繰り返し練習の必要性を強く痛感した。

③ 試合前の準備として

試合前だからと言って特別なことはしない。試合に入るまでの準備をルーティン化出来ていることが、いつも通りのプレーにつながると思われる。それぞれのチームの試合前の準備で、普段から何しているか、何を目的に意識しているか見えてくるチームは、試合でやり続けることが明確となっていると感じた。観戦したそれぞれ 4 チームの試合前の準備は、各々の準備の仕方があり落ち着いているようだった。高校生では、公式戦というだけでいつもとは違う精神状態になってしまったり、普段とは違った振る舞いをしてしまう傾向にあるように思う。特に甲子園をかけた試合にでもなれば、指導者も含め普通でいられる難しさは誰もが持つと考えられる。だからこそ、普段からルーティンを作って取り組む工夫が必要である。野球に限らず、どのスポーツでもルーティンは大切にしている要素の 1 つであるので、さまざまな分野から参考にしていきたいと思う。

④ 数値から野球を学ぶこと

野球を数値で考えることで、違った側面を知ることが出来る。研修中では、野球は 3 ストライクで三振になる、 3 アウトで攻守交代になる・・・など「3」に関係性があるという話が出た。それを踏まえて、1 試合 9 イニングを 3 イニングずつの 3 つに分け、それぞれ 3 イニングごとに勝敗をつけて試合を観戦することを実施した。すべての試合において、ビッグイニングは 1 回あったとしても 2/3 以上勝たなければトータルの試合で勝つことが出来ていなかった。観戦した母数自体は少ないが、采配する中でも 3 イニングごとを 1 区切りにすることによりメリハリのある試合展開に出来るのではないかと感じた。

また、バントを用いた進塁策と強硬策による得点率に大きな差はないことからも考えられることが多くある。無死一塁で送りバントをした場合の得点率は 40%、強硬策でも 40% である。われわれの経験論での常識で「バント＝確実」、「強硬＝リスキー」と思われていたことが、数値からみるとそうでもないということがわかる。これは 1 つの例だが、他にもわれわれの持つ先入観は、さまざまなケースを想定し、数値化することによって野球をより正確に考えることができるのではないかと思う。明確な数値、基準、確率を知ることで、より具体的な意図や目的を持った練習になり、それまで気づけなかった部分にも気づく可能性があると考えられる。指導者だけでなく、選手も数値としての目標が明確となるため、モチベーションにつながる 1 つの有効なものとなり得ると思われる。

3. 最後に

今回の研修では、試合の観戦で学ぶだけでなく、諸先生方との意見交換をする機会もいただき、非常に多くのことを学び得ることが出来た。自分自身の目で確かめ、調べるということが、正しいことを教えることにつながると思う。研修を通して感じ取ったものを現状と照らし合わせ、今後の展望を明確にし、将来の指導やチーム作り、運営に生かしていきたいと感じた。

３日間の貴重な指導者研修という機会を設けてくださった長野県高校野球連盟の方々に心から感謝申し上げます。また、当日も小林善一先生や役員の先生方に大変お世話になりました。ありがとうございました。